The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

『妙好人伝』における編者僧純の教説

菊藤明道

本稿は、僧純編『妙好人伝』（全五篇）に見える僧樸・仰誓・僧朗・履善・徳龍・南渓・泰巌など真宗の学僧の教説や儒学者・国学者たちの主張に注目しつつ、僧純の教説を明らかにするものである。

1　編者僧純について

僧純（寛政三年〔一七九一〕―明治五年〔一八七二〕）は、越後国中頸城郡西野嶌村（新潟県上越市吉川区西野島字立坪）の西本願寺派長徳寺（現、廃寺）の次男として生まれ、文化五年（一八〇八）越後国中頸城郡姫川原（新潟県妙高市姫川原）の正念寺の学寮・崑崙社に智泉（字・僧潤）の名で入り（正念寺蔵「崑崙社学士籍」）、崑崙社三葉勧学（興隆・僧朗・慧麟）の一人の僧朗（明和六年〈一七六九〉―嘉永四年〈一八五一〉）に師事して宗義を学び、文化十一年（一八一四）に美濃垂井（岐阜県不破郡垂井町）の専精寺の住職になっている。西本願寺第二十代広如門主に仕え、「天保の改革」といわれる本願寺の財政再建に大坂の石田敬起と共に尽力し、大谷本廟の石橋（円通橋）の架設、角坊別院（現、西本願寺飛地境内・角坊）の房舎の建設などさまざまな事業に携わった。

僧純が教化の面で尽力したのは『妙好人伝』（全五篇）の編集版行であった。

初篇　天保十三年（一八四二）
二篇　天保十三年（一八四二）（天保十四年（一八四三）説あり）
三篇　弘化四年（一八四七）
四篇　安政三年（一八五六）
五篇　安政五年（一八五八）
（各篇上下、計一〇冊。中山園専精寺蔵版本）

その他の著書に『高祖聖人皇都霊跡志』『親鸞聖人霊瑞編』『高祖聖人十恩弁』『仏説孝子経和解』『御真影略伝』『日本往生伝和解』がある。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

2　僧純編『妙好人伝』（全五篇）の特色

①「初篇」

「初篇」の上下両巻の内題の下には「釈仰誓撰」と記されている。「初篇」は、仰誓編『妙好人伝』を僧純が再編して版行したものであるが、僧純による改変が見られる。

僧純による改変に関しては、土井順一著『妙好人伝の研究――新資料を中心として――』（百華苑、昭和五十六年刊）に記述が見える。仰誓編『妙好人伝』と僧純編『妙好人伝』「初篇」を比較し、僧純の「初篇」には「師恩」と「国恩」が付加されていること、さらに「和州清九郎」の話において、妙好人が「愛山護法・本山崇敬・国法遵守型人物に造型されている」と指摘されている。

こうした僧純による改変は、当時の西本願寺教団の中央集権化の推進と、「天保の改革」といわれる西本願寺の財政再建や諸事業の遂行に尽力した僧純の思いがなしたものと思われる。

②「二篇」

巻上の冒頭に、西本願寺派の学僧・南渓（寛政二年〔一七九〇〕―明治六年〔一八七三〕）の「続妙好人伝叙」（漢文）が収められている。序の末尾に「天保十三年壬寅四月書于真宗学庠准水沙門南渓詢道」と記されている。

南渓は福岡県粕屋郡宇美町の西本願寺派信行寺に生まれ、大分県玖珠郡玖珠町戸畑の満福寺に入ったが、天保六年（一八三五）から本山の改革に尽力した。儒者中井竹山の仏教批判書『草茅危言』に対して、弘化元年（一八四四）『角毛偶語』（五巻）（『真宗史料集成』第十巻、所収）を著して反駁するなど、儒者・国学者たちの排仏論に対抗して護法運動を展開した。序の「花実香色妙而好。断謝生死胚胎涅槃。而不誇真不蔑俗、好而妙。雖不知一丁者、不復与酔生夢死為伍。妙好之嘉謚良有以哉」の文に南渓の妙好人観がよく表れている。

巻上に、仰誓の師僧樸が延享四年（一七四七）十月に書いた「越中九歳児」（『真宗全書』第六十二巻、「真宗小部集・巻二」陳善院法語。『真宗小部集』は仰誓撰）の話が収められ、その末尾に、「機の三業の上には往生の業因ひとつもなし。たゞ若不生者の御誓ひゆゑにこそ往生し侍るべけれと打任せてよろこび申さん人こそまことにうらやましき信者なれ」と三業帰命を否定する絶対他力の信心が説示されている。

また、巻上の末尾に「五国恩」を記している。

一、治世安穏恩　二、善悪賞罰恩　三、生涯撫育恩
四、邪法退治恩　五、仏法外護恩

幕府への恭順を示しているが、その背後には、当時の幕府の宗教統制の強化があったのではないか。

さらに、巻下に「師恩」について五義を記している。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

一、真宗相承の恩　二、大悲同塵の恩　三、邪正裁断の恩
四、旦暮教授の恩　五、詳示法度の恩

僧純は、門主を「大善智識様」「生如来様」（「三篇」巻上「越中佐治兵衛」）と記して門主崇拝を強調し、本山への懇志上納を勧めている。

末尾には、「妙好人伝二篇巻下終」と記された後に次のような僧朗の文が付されている（この文は、僧朗が「二篇」の初版本を読んで書いた感想文と思われる。僧純がそれを再版本に付したのであろう。なおこの文はその後の版本には見えない）。

この続妙好人伝二巻ハ、美濃国垂井の里なる中山園の主、古人の志をつぎて集められたるを披閲するに、これらの事実は人口に膾炙するのミならす、桑門ハ勿論、儒者の著せる近世叢語、あるハ心学者の選ひおける鳩翁道話等につらねたる人おほし。所謂、信ハ道元、功徳の母と説れしごとく、信者の徳として自ら王法国法仁義孝順の道までも如実に守る人すくなからねハ、挙て称せしと見ゆ。そが中に、内にハ善知識の恩賜をうけ、外にハ国主の褒賞を蒙るも多し。嗚呼、現当二世の利益きハまりなきものか。されバ、宿縁のあらんひと〱、この伝を常に坐のかたはらに置て法味を甘んじ、妻子にも読みきかせたまはゝ、自信教人信の道理（ことハり）にもかなふべきことならんかし。

拾ひおきし玉のかす〱よみとらハ
　ミのたからともなりぬへきかな

天保十四癸卯の夏　越後釈僧朗
（印）「勧学」「僧朗」

ここには僧朗の「二篇」に対する見解がよく示されている。とくに、「桑門ハ勿論、儒者の著せる近世叢語、あるハ心学者の選ひにおける鳩翁道話等につらねたる人おほし。所謂、信ハ道の功徳の母と説れしごとく、信者の徳として自ら王法国法仁義孝順の道までも如実に守る人すくなからねハ挙て称せしと見ゆ」と記している箇所が注目される。僧朗は、僧純が「二篇」を編集するにあたって、儒学者・角田九華著『近世叢語』や石門心学者・柴田鳩翁の道話を収めた『鳩翁道話』からも話を採り、国法順守と仁義・孝順の道を教示していると見たのである。西本願寺教団の「真俗二諦」の教説が窺えよう。

③「三篇」

冒頭に、播州の泰厳と伊予の克譲（石見浄泉寺の学寮で仰誓の子履善に学んだ。『新続妙好人伝』の編者）の序（共に弘化四年〔一八四七〕夏）が併記されている。

播州の泰厳については、これまで「未詳」とされてきたが（『浄土仏教の思想』第十三巻、講談社、八十頁、柏原祐泉「妙好人――その歴史像――」第三章「近世妙好人伝の成立」）、調査の結果、次のことが判明した。

泰厳は、兵庫県姫路市夢前町護持の西本願寺派本誓寺の第十二代住職で、号を「天華」と称した。父は江戸後期の本願寺派の学僧で、三業惑乱事件に関与した智洞門下八僧の一人とされ、回心状を出さずに赦免された本誓寺第十一代住職・

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

密厳（宝暦十三年（一七六三）―文政二年（一八一九））である。

泰厳の序の、「公之此挙不四特使三レムルノミ人ヲ帰二-入願-海一、其所レ集ル嘉-言善-行、亦足三以テ補フニ二世-教ヲ一矣」の文から、泰厳が、僧純の『妙好人伝』は人々を願海へ帰入させるだけでなく、妙好人の嘉言と善行が「世教ヲ補フニ足ル」として本書の倫理的意義を評価している。

それに対し、克譲の序に記される妙好人は、親鸞が教示した「本願を聞信する念仏者」であり、善導が「五種嘉誉」（①好人②妙好人③上上人④希有人⑤最勝人）として示した妙好人である。

巻上には「雲州神谷備後」など奇瑞・霊瑞の話が多く、『往生伝』類から採った話も数話収められている。「加州信女」の話は慶滋保胤撰『日本往生極楽記』から、「播州妙涼」「摂州妙了」「京都又兵衛女」「泉州宗信」の四話は月筌撰『親聞往生験記』（「真宗関節」巻五付録。『真宗全書』五十三巻、所収）から採っており、往生の奇瑞・霊瑞が記されている。

巻下に説かれる僧純の教説は次のとおりである。

一、神明帰仏　二、帝王帰仏　三、公武帰仏　四、神職帰仏　五、神棚の事　六、鬼門　七、金神　八、物忌みの事

僧純は、「神明帰仏」の冒頭に、「儒道・神道に片よりて仏法を誹謗する徒」の惑いを解くため、神明帰仏・帝王帰仏・公武帰仏・神職帰仏の四つを説くと記している。一～四で仏教の優秀性を述べ、五～八で「神祇不拝」「神祇護念」「物忌み否定」を教示している。神社に権社・実社の別があること、権社の霊神の本地は釈迦・弥陀・薬師の三如来と八菩薩であり、これらはすべて弥陀一仏の分身であって、「弥陀をたのめ」と告げられると教示している。実社とは人・畜を問わず生霊・死霊など祟りをなす邪神である。存覚の『諸神本懐集』を援用して、仏に帰依すれば諸神の意に叶うことになると説いている。なお、「神祇護念」については、「二篇」巻上「芸州九右衛門男」の話の末尾にも「神明の恩徳」を五種記している。「和光同塵恩・随機結縁恩・賞罰現前恩・願海引入恩・信徳護持恩」である。その後に「こゝろだにまことの道にかなひなば祷らずとても神やまもらん」と詠んでいる。

この「神明守護」については、「五篇」巻上の「越後弥平次」の話の後にも、本願寺派の学僧（第二代能化）知空の『御伝鈔照蒙記』や存覚の『親鸞聖人正明伝』などを引いて述べているが、その末尾に、「神明に現世の寿福を祈らんと思ふ心あらバ、その祈心をやめて本師の弥陀仏に帰し奉れハ、神は喜びて其人を守りたまふなりと諸神本懐集にあきらかなり」と記している。

このように、僧純は神祇不拝を説きつつ、神明守護・神祇護念を強調し、物忌みや現世祈祷を否定したが、それは『教行信証』「化身土巻」外教釈の神祇不拝・吉凶否定と、『現世

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

利益和讃』の神祇護念の教説、さらに、存覚の『破邪顕正鈔』『諸神本懐集』『持名鈔』等の神祇不拝・神祇護念の説示に拠ったものと思わる。

末尾の「掟こ、ろえ歌」では、「自信教人信」「仏恩報謝」の生活と、諸神・諸仏不軽のほか、守護・地頭への恭順、年貢・所当の完納、孝行・忠義・仁愛・倹約・家業精励などの世俗倫理を教示している。

④「四篇」

巻上の「濃州樹誓」の話に、美濃国大垣の縁覚寺の坊守「千代」（法名・樹誓）に宛てた僧樸の手紙が載せられ、その中に、他力の信心は凡夫が発起するのではなく、如来の誓願にまかせ仏智不思議と思って仏恩報謝の称名を励むよう説いている。「二篇」巻上に収められている僧樸の「越中九歳児」の話にも見える無疑の信心を勧めている。

また、巻下の「摂州さよ女」の話に、攝津国有馬郡の光専寺の坊守「さよ」に宛てた仰誓の手紙が収められている。仰誓は、手紙の中で、ご法義相続を大切にして念仏し、この世のこともうるわしく、親子・夫婦・兄弟仲良くし、愚者になって日夜称名相続するよう諭している。

また、三業帰命への批判がなされている。

巻下の「越中のよ」「奥州とく」の話に「三業固執の徒」への批判が見られる。

巻下末尾には、「家内相続」と題して、家内の法義相続の大切なことを記している。「王法仁義・孝道」を順守し、「仏祖・善知識の御恩」と共に、「仏法守護の御国恩」を忘れず、「一家の御法義相続が、遂に一郡一国の仏法弘通の基となる」と説いている。

⑤「五篇」

巻上に僧純の序が載せられている。その末尾に、「世の掟をだに守りなば、老がよろこび此上やあるべき」と記して世法順守を表明している。因みに、「五篇」が版行された安政五年（一八五八）は、安政の大獄が行なわれた幕末動乱の年であった。

巻下末尾には四恩が記されている。

一、仏恩　二、師恩　三、国恩　四、親の恩

一、「仏恩」では、阿弥陀如来の恩徳の広大なることを説き、常に念仏して大悲弘誓の恩を報ずべきことを教示している。

二、「師恩」では、祖師・善知識の恩徳の広大なことを説くのに「恩徳讃」を記した後、二篇巻上に記した門主の五恩を再度記している。

一、大悲同塵の恩　二、真宗相承の恩　三、邪正裁断の恩
四、旦暮教授の恩　五、詳示法度の恩

末尾には、当（安政五年（一八五八））春、親鸞聖人の恩徳を人々へ知らせるため『高祖聖人皇都霊跡志』（濃州垂井・中

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

山園所蔵）を版行したので披見するよう記している。本書は三年後の文久元年（一八六一）の親鸞聖人六百回大遠忌を前にして版行されたものであり、聖人の誕生地や往生地などの旧跡が紹介されている。また、僧純は、文久二年（一八六二）に『高祖聖人十恩弁』を版行しているが、その付録に四恩「仏恩之十義・師恩之五義・国恩之五義・親恩之詠義」を記している。

三、「国恩」では、国の五恩（治世安穏の恩・善悪賞罰の恩・邪法退治の恩・仏法外護の恩・生涯撫育）を説き、国法順守、国主・地頭への恭順、年貢・所当の完納など、幕藩体制への恭順を教示している。

四、「親の恩」は、存覚の『報恩記』の「現当二世の孝養父母」の教説に拠ったと思われる。その後に「孝行粉引歌」を載せている。孝行譚は『妙好人伝』に「和州清九郎」（「初篇」巻上）、「江戸庄之助」（「二篇」巻上）、「防州おいし」（「二篇」巻下）、「越前治左衛門」（「三篇」巻上）、「筑前正助」（「五篇」巻上）などしばしば見えるが、僧純は「三篇」を版行した弘化四年（一八四七）から二年後の嘉永二年（一八四九）に『仏説孝子経和解』（二巻）を版行している。同書の巻上に僧朗の序が見え、巻下に、『妙好人伝』所収の「和州清九郎」（「初篇」巻上）、「三州利右衛門」（「三篇」巻上）、「防州おいし」（「二篇」巻下）の孝行譚が収められている。また、『高祖聖人十恩弁』の付録の「四恩」の「親の恩」にも、『妙好人伝』「五篇」の「親の恩」が再録され、『仏説孝子経』と『父母恩重経』によって「在胎守護恩」から「究竟憐愍恩」まで「親の十六恩」を記し、最後に「骨肉授与恩・養育無比恩・愛愍護持恩・産業指南恩・財物付属恩」の五恩を記している。

このように僧純は「孝行」を力説したが、その背後には、幕府の孝子顕彰政策や儒者・心学者たちの孝子顕彰運動があり、真宗の立場から応答する必要があったと思われる。

僧純の世俗倫理説示の背後には、江戸幕府の民心善導政策があったこと、また、『妙好人伝』「五篇」巻下「尾州渡辺氏」の話の末尾に見える江戸後期の東本願寺派の学僧徳龍の影響が考えられよう。徳龍は『掟五常義略弁』『五倫弁義記』『真宗僧家之庭訓』『僧分教戒三罪録』『坊守教戒聞書』等を著し、妙好人物種吉兵衛や近江商人松居遊見らを教化した。

3　まとめ

僧純は越後正念寺の崑崙社で僧朗に学んだが、仰誓・履善・克譲など石州学派の学僧たちの影響も受けていた。また、『妙好人伝』に仰誓の師僧僕の法語〔陳善院法語〕（第二篇「越中九歳児」）や、僧僕が教化した「堺祐貞尼」（第五篇）の話を収めている（僧僕は名号大行説。因みに、仰誓と同じ僧僕門下で空華学派の祖といわれる僧鎔は、僧僕が開創した堺の祐貞寺を継いでいる）。さらに、「四篇」巻上の「越中幼女」の末尾に、この

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

話は、僧鎔の門弟柔遠門下の充賢から聴いたことを記している。僧純が空華学派の影響を受けていたことは間違いないであろう。

僧純は『妙好人伝』の中で「信心正因・称名報恩」を強調し、三業帰命を批判している。「四篇」巻下の「越中のよ」「奥州とく」の話に「三業帰命の徒」への批判が見えるが、そこには、僧純が功存の三業帰命説を批判した石見浄泉寺の履善と親交があったことが注目されよう。文化三年（一八〇六）西本願寺本如門主が「安心裁断書」で古義派を正義として終息した三業惑乱事件が、五十年後の「四篇」版行の安政三年（一八五六）の時点でもその余燼が見られたのであろう。「長州おかる」（「三篇」巻上）「摂州さよ」（「四篇」巻上）の信心の歌や、「三州その」（「四篇」巻下）の言葉にも、ひたすら如来の願力にゆだねる絶対他力の信心と仏恩報謝の称名が記されている。

また仰誓や克譲の『妙好人伝』以上に奇瑞・霊瑞が多く記されている。佐々木倫生氏の「『妙好人伝』とその作者たち」（仏教文学研究会編『仏教文学研究』第二号、法蔵館、昭和三十九年二月。朝枝善照編『妙好人伝研究』永田文昌堂に再録）には、往生奇瑞・来迎瑞相・蘇生奇瑞の統計数字が記されている。

さらに、慶滋保胤撰『日本往生極楽記』、月筌撰『親聞往生験記』、浅井了意撰『三国浄土勧化往生伝』など数種の『往生伝』から採った話が見える。「三篇」巻上「加州信女」は慶滋保胤撰『日本往生極楽記』四二「加賀国一婦女」から、「播州妙涼」「摂州妙了」「京都又兵衛女」「泉州宗信」の四話は月筌撰『親聞往生験記』から、「四篇」巻上「伯州九右衛門」の末尾に記される猿と鶯の往生譚は『三国浄土勧化往生伝』から採っている。

また、『妙好人伝』「三篇」を版行した弘化四年（一八四七）から四年後の嘉永四年（一八五一）に『日本往生伝和解』（二巻）を版行しているが、そこにも奇瑞・霊瑞が記されている（拙論「『往生伝』と『妙好人伝』について」（真宗連合学会編『真宗研究』第五十二輯、平成二十年三月）。

さらに僧純は、『妙好人伝』「五篇」を版行した安政五年（一八五八）に京都における親鸞聖人の御旧跡十三箇所を紹介した『高祖聖人皇都霊跡志』（一巻）を版行し、三年後の文久元年（一八六一。親鸞聖人六百回大遠忌）に『親鸞聖人霊瑞編』（一巻）を版行したが、僧純没（明治五年、一八七二）後五年目の明治十年（一八七七）に、美濃垂井の専精寺住職中山令純が補刻版行した僧純記『親鸞聖人霊瑞編』（二巻）が国立国会図書館に収蔵されている。僧純が霊瑞伝承に関心を寄せていたことが知られる。

僧純は奇瑞・霊瑞について、『妙好人伝』「二篇」巻上「筑前明月女」の話の末尾に、「浄土真宗には、唯仏願の不思議

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

を尊みて機辺の奇特をかたるを善とせず。されど、法徳に約して又あふぎ貴むべき義なきにしもあらず」と記している。それについて、僧純が西本願寺派の学僧月筌（寛文十一年〔一六七一〕—享保十四年〔一七二九〕）の『真宗関節』巻五「不来迎問答」（『真宗全書』第五十三巻）に説かれる臨終の祥瑞を肯定する教説や、その後に付されている『親聞往生験記』から影響を受けていたことは、同記の四話（①妙涼尼往生ノ瑞夢ヲ感スル事②妙了尼臨終ニ見仏ノ祥瑞アル事③妙智童女往生ノ現瑞アル事④宗信禅門遺言の事）を『妙好人伝』「三篇」巻上に採録していることからも窺える。

　僧純は『妙好人伝』の編集にあたって、大乗経典・浄土経典、浄土宗・真宗・禅宗の諸書のほか、儒学・心学・神道・陰陽道・伝記・史書・歌集など多くの書物を参照している。僧純編『妙好人伝』（全五篇）に記される書物は次のとおりである。

　『無量寿経』『観無量寿経』『涅槃経』『般舟三昧経』『薬幹喩経』『心地観経』『法華経』『正信偈』『御和讃』『御文章』『来意鈔』『改悔文』『御一代聞書』『御伝鈔』『元亨釈書』『本朝通記』『沙石集』『南嶺子』『袋草紙』『空也伝』『撰集鈔』『日本書紀』『続日本紀』『日本後記』『天下太平国土安穏記』『三代実録』『浄土高祖伝』『日本往生極楽記』『日本往生伝』『天竺往生伝』『勧化往生伝』『念仏往生伝』『続念仏往生伝』『真宗関節付録親聞往生験記』『往生要集』『和語灯録』『拾遺古徳伝』『照蒙記』『論語』『易経』『書経』『鳩翁道話』『続鳩翁道話』『近世叢語』『良民伝』『聖学問答』『谷響集』『和論語』『一枚起請文』『一言芳談抄』『国史略』『説苑』『正明伝』『春日記』『諸神本懐集』『清九郎伝』『孝信庄之助伝』『七三郎生涯記』『百条法話』『博多記』『石城志』『西光寺譲状』『西応寺了幻記録』『僧分教誡』『坊守教訓』『高城家儀』『真行寺隆性記録』『僧樸書簡』『仰誓筆録』『仰誓書簡』『誓鎧記録』『本迹一致問答』『諭客護法篇』『僻難対弁』『南嶺子』『考信録』『神道俗談弁』『雪窓夜話』『三カ条筆録』『神棚訣』『神仏水波弁』『随問試答篇』『来意鈔』『顕正鈔』『神道講述論』『太神宮式目』『神社考』『神国決疑論』『延喜式』『玉葉集』『玉林集』『百錬鈔』『詞花集』『雑類集』『簠簋内伝』『簠簋内伝諺解』『経伝子史』『閑論』『風俗通』『仏像図彙』『東海道名所図会』『本厳集』『四恩論』『石清水護国寺縁起』

　僧純は『妙好人伝』で真宗の篤信者の言行を紹介するだけでなく、西本願寺教団内の異安心や儒学・心学・国学などの動向を考慮しつつ、西本願寺教団の教説や宗風を説示したのである。

〈キーワード〉　真宗、江戸時代、僧純、妙好人伝、教説

（京都短期大学名誉教授・文博）

NII-Electronic Library Service